



令和2年度 校長だより

令和3年3月24日(水)

# 大野の風

No. 10

文責 松下 義彦

## 一年間を振り返って

生徒のみなさん、もうすぐ今の学年が終わり、4月からは新しい学年に進級します。この一年間を振り返ってみてどうだったでしょうか。コロナ禍の中、なかなか思うような活動ができなかったでしょうが、年度当初に立てた目標は達成できたでしょうか。みなさんは、多くの可能性を秘めています。そして、努力によって未来への可能性をどこまでも広げることができます。決してその可能性には、限界がありません。そこで、様々な可能性に挑戦してくれる大野中生であって欲しいと校長先生は思っています。

例えば、みなさんの中には、数学が得意な人、逆に苦手な人もいます。また、絵を描くことや歌うこと、運動することが得意な人、逆に苦手だと思っている人もいます。

しかし、私たちは努力すればどんなに苦手なことも克服することができます。そして、得意なことをもっと伸ばすこともできます。ただ苦手であるから「自分はできない」「努力しようとしなさい」という諦めの気持ちや逃げの気持ちであれば、もちろん可能性を広げることができません。

元プロ野球選手で、ロッテや中日、ジャイアンツ、日本ハムで活躍され、3度の三冠王に輝き、中日の監督時代には4度のリーグ優勝、日本一にも一度チームを導いた落合博満さんは、

**「信じて投げて打たれるのはいい。信じて投げて打たれたのなら、それは結果。一番いけないのは、やる前から打たれたらどうしよう考えること。」**

と言われています。

校長先生も、経験の中で「できないかも知れない」「たぶんでできないから諦めよう」などと考えたことがたくさんあります。なぜ、そんな気持ちになったのかを考えてみると、それは、「上手に成功しよう」とか「人に恥ずかしくないように見せよう」など、行動することよりも先に、結果を心配することや周りからどう見られるかばかり考えているからだ気づいたことがあります。そんな時、開き直って「他の人から失敗して、笑われても良いから、まず、できるところまでやってみよう」と考えてやってみると、案外満足できる結果となるが多かったと思っています。みなさんも、失敗を恐れず、周りの目を気にせず、常に挑戦すること、努力することを忘れないでください。

さて、今年の一年間は様々な行事が中止になり、みなさんにさみしい思いをさせたことでしょう。今年の一年間はコロナ禍のため今までの日常生活とは違う行動を取らざるを得ませんでした。しかし、そんな中でもみなさんはしっかりと学校生活を送ってくれました。校長先生は、人の価値は今までとは違う状況に置かれたときに、自分ができることは何なのかを判断し、できることを精一杯やることにあるのだと思います。ただ単に成績が良いとか運動ができるだけではだめだと思います。学校や塾で習うことを知識や技能として習得するだけでなく、その知識や技能をどう生かし、自分の生活に取り入れ「生きる力」として働かせるかが大切です。さらに、今まで当たり前のようにあった日常がなくなった一年間でしたが、逆に周りの人や物の有り難さがわかった一年間でもありました。コロナ禍の中、密を避けるために人との接触を制限され、友達との会話や一緒に遊びに行くことなどが思うようにできず、また、会いたい人にも会えないなど、とてもつらい一年間でした。だからこそ、人と人とのつながりの大切さや周りの人とコミュニケーションを取ることの素晴らしさを深く考えさせられる一年間でした。周りの人に思いやりの心を持ち、いじめなどがなく、人と人との絆を大切にす大野中生であって欲しいと願っています。この一年間、コロナ禍だったからこそ考えさせられたことがたくさんあります。この一年間を無駄にせず、次の新しい一年間がみなさんにとって素晴らしい一年間になるように頑張ってください。期待しています。

